最後の戦いが終わったとき

三月　亜莉棲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最後の戦いが終わったとき

【Ｎコード】
Ｎ３７４８Ｘ

【作者名】
三月　亜莉棲

【あらすじ】
これはハリーポッターのその後です。ハリーの子供の名前がわかんないので作りました。オリキャラありです♪ハリーの子供、ジェームズはホグワーツの１年生。恋あり青春ありのどたばたコメディー。

登場人物（前書き）

ハリーの子供など名前がわからないので
作っちゃいました（笑））
よろしくお願いします

登場人物

ジェームズ・ポッター
寮・・・グリフィンドール
杖・・・不死鳥の尾羽　３０ｃｍ
性格・・・ハリーに似て好奇心旺盛。
　ジュリアのことが好きでクィディッチは
　ハリー並みのうまさがある。

ジュリア・ウィーズリー
寮・・・グリフィンドール
杖・・・ドラゴンの心臓の琴線　２６ｃｍ
性格・・・あっさりした性格。
　ハーマイオニーに似て髪は金髪。
　勉強が大好きでジェームズが好き。

ルーズ・マルフォイ
寮・・・グリフィンドール
杖・・・ユニコーンの尾の毛　２５ｃｍ
性格・・・マルフォイと少し似ているが、
　とってもやさしい。ジェームズとは
　だいの仲良し。

アリア・グリフィンドール
寮・・・グリフィンドール
杖・・・ユニコーンの尾の毛　３０ｃｍ
性格・・・学校の創設者、グリフィンドールの子孫。
　スーザンとは幼馴染。

スーザン・ハッフルパフ
寮・・・ハッフルパフ
杖・・・ユニコーンの鬣の毛　２５ｃｍ
性格・・・学校の創設者、ハッフルパフの子孫

アリアの幼馴染でルーズが気になる。
バック・スリザリン
寮・・・スリザリン
杖・・・不死鳥の尾羽　２５ｃｍ
性格・・・学校の創設者、スリザリンの子孫。
明るいがナルシスト。でも面白いため、みんなと仲がいい。
アンディ・レイブンクロー
寮・・・レイブンクロー
杖・・・ユニコーンの鬣の毛　２０？
性格・・・学校の創設者、レイブンクローの子孫。
明るいがとてもマイペース。かっこいい。
フローラ・グレンチェン
寮・・・グリフィンドール
杖・・・ユニコーンの尾の毛　３０ｃｍ
性格・・・ナルシスト自分が何でも一番だと思っている。
ジェームズの事が好きで、ジュリアを見下している。
マルク・ショートニングス
寮・・・スリザリン
杖・・・不死鳥の尾羽　２５ｃｍ
性格・・・頭がいい、ジュリアが好きでいつもアプローチしている。
親が金持ちなため、権力で何でもしてしまう。
レイラ・コーラル
寮・・・レイブンクロー
杖・・・ドラゴンの心臓の琴線　３２？
性格・・・明るくてなんでも頑張るやさしい女の子。
セイラと仲が良くて勉強の成績は学年で１．２を争う。
セイラ・ローズ
寮・・・レイブンクロー

杖・・・ユニコーンとマーラの髪の毛　２１？
性格・・・温厚な性格。静かだが、魔法の
威力は計り知れないほど。
レイアンが怒ってもセイラは軽々よけてしまう。

マリア・スーティー
寮・・・レイブンクロー
杖・・・ユニコーンの鬣の毛　２０？
性格・・・チョウの娘。
明るくて、皆に慕われている。
成績がよくマグルと魔女のハーフ。

レイアン・ブラッキー
寮・・・スリザリン
杖・・・サンザシにユニコーンの毛　３４？
性格・・・短期ですぐに怒る。
怒らせると相手はレイアンに蛇をだされ
殺されかける。

登場人物（後書き）

なんかおおくなっちゃいましたね。
これからよろしくお願いします。

ホグワーツからの手紙（前書き）

がんばるぞう！！
感想等お願いします♪

ホグワーツからの手紙

・・・ダダダダダダダダダダダダダダダ！！

「父さん父さん！！」

「どうした、ジェームズ。そんなにあわてて」

「手紙が・・・ホグワーツから手紙が届いたよ！！」

「あぁ！もうそんな時期か！」

「どうしたの？あら、ホグワーツの手紙じゃない！」

「あけていい？」

「あぁ」

カサッ

ジェームズ・ポッター殿

あなたは今年の９月からホグワーツで

魔法を習う事、学習する事を正式に許可します

「やったーーーーーーーーーー！！これで父さんと母さんのいったホグワーツに行けるよ！」

「よかったな。じゃあ明日、ダイアゴン横丁に行っているものを買いに行くか。」

「やったーーーーー！！」

ポスッ

「あら？手紙が来た見たいね。」
「ジェームズ、あなたによ。ジュリアから。」
「ほんと！！」

ジェームズへ

聞いて！！
あたしにホグワーツから手紙がきたの！
お母さんとお父さんの行ったホグワーツにいけるのよ！！
ジェームズは手紙は来た？
お返事頂戴ね♪

ジュリアより

「父さん！ジュリアもホグワーツに行く事が決まったみたいだ！！」
「そうか、じゃあハーマイオニーとロンに言って一緒に買い物に行くか？」
「うんっ！！」
「ってことは久しぶりにロンに会えるのねぇ久しぶりだなぁ。」
「ロンは忙しいからな、俺は仕事場一緒だから毎日会うけど。」
「ジェームズ、じゃあ今日中に今行ってる学校に転校手続きしとかないとね。
一緒に来る？」
「うんっ！」

「じゃあ俺はハーマイオニーたちに会いに行ってくるよ。ジェームズにも手紙が来た事を

言っとかないとな。」

そして母ジニーはジェームズと学校へ。

父ハリーはハーマイオニーとロンに会いに家をあとにした。

ホグワーツからの手紙（後書き）

うまくかけましたかね？
感想等お願いします♪

ちなみにハリーとロンは闇払いになったという設定です。

買い物　～ダイアゴン横丁～（前書き）

買い物スタートです♪

ハーマイオニーのいとこ作っちゃいました、（アイリーン・グレンジャー）

買い物　～ダイアゴン横丁～

「ジュリア！久しぶり。手紙ありがとう♪」
「ジェームズ、お互いおんなじ学校でよかったね♪」

このときこの二人は確実に結ばれるだろうとハーマイオニー、ロン、ハリーは
思った。

「じゃあまずは杖を買いに行こう、オリバンダーまでいこう。」

「じゃあ先に行ってて？グリンゴッツに行ってこの子達のお金を取ってこなくっちゃ。」
「まだとってきてなかったのか？」
「ロン。しょうがないじゃない、昨日までいとこのアイリーンが来てたんだから。」
「じゃぁしょうがないな。じゃあ行こうか。」

そしてハーマイオニーは姿現しを使って、グリンゴッツへ、
ロンとハリー、ジュリアとジェームズはオリバンダーにむかった。

カランッ

「オリバンダーさんいますか？」

ガラーッ　ドン

「おやっ？ハリーとロンじゃないか！それにそこにいるのは子供だね？」
「えぇ僕たちのお互いの子供です。」
「ほぉー！じゃぁココに来たのはその子たちの・・・」
「ホグワーツの入学が決まったんです。」
「おぉ！そうか！！じゃあ杖を選んであげよう。これはどうかな？」
オリバンダーはジェームズにユニコーンの毛　２５ｃｍを、
ジュリアに不死鳥の尾羽　３０ｃｍをだしてくれた。
「ふってみなさい」
ジェームズとジュリアは杖をふった。
バリーーンッ　　バシーーーンッ
「はて？ちがったかぁ・・・じゃぁ・・」
そしてジェームズとジュリアはそれから3本ほど（！！）杖を変えてためし
ジェームズは不死鳥の尾羽３０ｃｍ、ジュリアはドラゴンの心臓の琴線　２６ｃｍに決まった。
カランッ
「遅れてごめんなさい。ハリー、ロン。ジェームズとジュリアの

杖は決まった？」
「あぁ。決まったよ。」
「そう。じゃあほかにいるものを買いに行きましょう。」

そして一向はいるものの数々の品をかい、ジュリアにはめんふくろうジェームズもめんふくろうで
ジュリアは「ポリア」となずけジェームズは「クース」となずけた。

ホグワーツ　～入学～（前書き）

やっと入学です（汗）
遅かったですね・・・でも
たぶん早かったほうだと思います（えっ！

ホグワーツ　～入学～

「みなさん初めまして。校長のマクゴナガルです。これから組み分けをします。私についてきてください。」

僕はマクゴナガル先生のことを父さんから聞いてたんだ。それにジュリアの母さんもココの教師だからいろんな先生の話を聞いたりしたんだ。

「それではこれから組み分けを始めます。」

組み分けが始まった。ジュリアも僕もそしてルーズもグリフィンドールにはいりたい。

「アリア・グリフィンドール」

グリフィンドール？なんで寮と同じ名前なんだ？

「グリフィンドール！！」

アリアはグリフィンドールに入った。あとできいたが彼女は学校の創設者、グリフィンドールの子孫らしい。

「アンディ・レイブンクロー」

今度はレイブンクロー！？

「レイブンクロー！！」

こちらも後で聞いたがレイブンクローの子孫らしい。

「スーザン・ハッフルパフ」

今度はハッフルパフ！？

「ハッフルパフ！！」

こちらも子孫である。

「フローラ・グレンチェン」

今度は普通だ・・・よかった・・・

「グリフィンドール！！」

彼女はグリフィンドールか・・・なんだかめんどくさそう・・・

「マルク・ショートニングス」

かわった名前だなぁ・・・

「スリザリン！！」

スリザリンか・・・なんかあいつずっとジュリアのことみてないか？

「ルーズ・マルフォイ」
ルーズの番だ！！
「うーーん。まようのぉ・・じゃぁ・・グリフィンドール！！」
「やったーーーー！！」
ルーズはグリフィンドールだ！！」

組み分け（2）（前書き）

第2です（笑）

組み分け（2）

「ジェームズ・ポッター」

僕の番だ！

「グリフィンドール！！」

ほんとになれた・・・あの・・グリフィンドールに！！

「ジュリア・ウィーズリー」

ジュリアだ！

「グリフィンドール！」

「やったわ！」

ジュリアもグリフィンドールだ！

「バック・スリザリン」

今度はもう驚かないぞ。

「スリザリン！」

やっぱり・・・

そのあと、すべての生徒の組み分けが終わり、宴も終わったあと、監督生につれられてそれぞれの寮に帰っていった。

「ジュリア！ルーズ！」
「ジェームズ！同じ寮になれてよかったわね！お母さんに手紙書かなきゃ！」
「俺も！お父様に書かなきゃいけないな。お父さん的にはスリザリンも良かったかもしれないけど」
「あらあら・・なにをお話しているの？」
「えっと・・キミは・・・」
「フローラ・グレンチェンよ！」
「そうか。フローラ。別に何の話でもいいだろう？僕たちの話だ。」
「ふんっ別にいいけど・・・それとジュリア・ウィーズリー。」
「なに？あと、そのジュリア・ウィーズリーっていいかたやめてくれない？」
「そんなのどうでもいいわ。それよりあなたはあまりジェームズの近くに寄らないことね。」

そういって、フローラはいってしまった。

「なんなんだ？ジュリアきにするなよ？俺らはいつでも一緒なんだから！」
「ありがとう。ルーズ。気にしないことにするわ。」
「あなたたち、フローラ・グレンチェンを甘く見ないほうがいいと思うわよ？」

そういったのは、アリアだった。
「どういうことだ？教えてくれないか？」
「いいわ・・・」
そしてアリアは語り始めた。

組み分け（2）（後書き）

うまくかけたかな？

フローラは・・・（前書き）

アリアの語りですね☆

フローラは・・・

フローラはアリアとマグルのとき同じ学校だった。

そのとき、フローラはお金持ちなことをいいことに
ターゲットを決めてはいじめていた。

「やめて！やめて！お願いだから・・・」

そしてあるときアリアは我慢できず思わず魔法を使ってしまったのだ。

しかし・・・フローラはそれを・

「そんなていど？」っと

受け止めてこういった。

「あたしはそんなの聞かないわ？あたしに勝てるとでも？」

アタシ自身、危害は加えてはならないと弱めにしてしまったためこうなってしまった。

そのとき、いじめられていた女の子はもういじめられなくなったがいまだに内心びくびく

しているとこの前手紙があったという。

その数週間後、フローラに手紙が届いたという。

（アリアは子孫の為、ホグワーツに入る事は決まっていて手紙は

こない。）

「怖ぇー。」
「でしょ？」

「だから気をつけたほうがいいよ。」
「ありがとう！アリア。」
「ううん。同じ寮の大切な友達だもの！」

そして、ルーズとジェームズとジュリアとアリアはこれからほとんどのときを一緒に過ごすようになった。

フローラは・・・（後書き）

短いですね（汗）がんばって投稿していきます！

あれから数ヶ月の冬　―クィディッチ―　（前書き）

うまくかけてますかね？

感想等お願いします♪

あれから数ヶ月の冬　―クィディッチ―

今日はクィディッチの試合の日。

対戦相手はスリザリンなんだ！

「今日どっちが勝つかしら？グリフィンドール、後1勝でリーグ優勝だもんね♪」

「アリア。それ勝つってわかってるでしょ。」

「あっやっぱわかる？」

「まっそうだよねぇ。だってルーズとジェームズいるし。」

じつはリーグが始まった頃、ジェームズとルーズはマクゴナガル先生にスカウトされ、
ハリーの時同様一年生でクィディッチの試合に出れるようになり試合でいつも点数を1点は
いれる、ビーターと（ルーズ）シーカー（ジェームズ）になったのだ。

そのとき、スリザリンのクィディッチチームが横を通ったとき
ローズは耳元で何かささやかれた。

「僕が勝ったら、パーティーのダンスのお相手よろしく。」

「へっ？」

ささやいたのは、前からローズにちょっかいを出していたマルクだった。

「ローズ・・・」

パーティーというのは、２週間後にあるダンスパーティーだ。
パーティーの相手は男性の方から声をかけ、女性はそれをイエスかノーで答える。

「どうしよう。まさか・・・」

「朝、ジェームズに言われた事に関係あるの？」

「うん・・・多分・・・」

朝、ローズはジェームズの異変にきずいていた。
それで・・・
「ジェームズ？どうしたの？」
と聞いたら、

「あのさ・・・今日、クィディッチでグリフィンドールのチームが勝ったら
ダンスパーティーに一緒に行ってくれないかな？」

といわれてしまったのだ。

そして今、試合の真っ最中にいたる。

あれから数ヶ月の冬　―クィディッチ―　（後書き）

うひょー！
ちなみにダンスパーティーは
炎のゴブレットをモデルにしました。

ダンスパーティーのお相手は？（前書き）

ちなみにアリアのダンスパートナーはアンディ・レイブンクローですよ☆
そしてなんとルーズはスーザン・ハッフルパフとダンスパートナーになりました！

その他のパートナー表

バック・スリザリン　↓　レイラ・コーラル（同じ学年）
フローラ・グレンチェン　↓　レイダス・ハーピー（上級生）

とまあこんな感じです（汗））

マルクはお金をつかってジェームズと勝負するためシーカーになりました。

ダンスパーティーのお相手は？

「「「「「がんばれがんばれグリフィンドール！！（繰り返し）」」」」」

「さあおっとグリフィンドールシーカー『ジェームズ』がスニッチを発見！
おっとスリザリンシーカー『マルク』もスニッチをおっています！どっちが
勝利をてにするのか！？おーっと『レイラ』がゴール！！
グリフィンドール１０点！」

（あたし、どっちにかってほしいのかな？・・・）

「おーっと！マルクスニッチをとるか！？」

（えっ！お願い！！とらないで！）

「おーっと！ジェームズスニッチを取ったーーー！！試合終了！
勝利グリフィンドール！！」

（勝った・・・そうだ・・・あたし・・ジェームズがすきなんだ・・・）

「ジェームズやったな！」
「あぁ！ルーズ！お前も今回５０点いれたんだろ！！」
「きつかったけどがんばったぜ！！」

「ジェームズ、来てくれる？」

「あっうん！ルーズちょっとまっててくれ」
「わかったじゃあ談話室で会おうぜ！」
「ああ！！」

「ローズ、どうしたんだい？」
「あのね・・・その・・ダンスパートナーの話お受けします。／／」
「それほんと！？うれしいよ♪でもほんとに僕でいいの？」
「じつわね・・・あたし・・ジェームズがすきなの・・・
　今回のクィディッチでわかったの・・・」
「・・・じつは・・・僕もローズが好きなんだ。」
「ほんと？」
「ああ」

そして二人の影が重なったのは言うまでもない。

そしてその頃のルーズは・・・

「スーザン、いまいいか？」

「なに？」

ダンスパーティーのお相手は？（後書き）

うまくかけてたらいいなとおもいます♪
感想等お待ちしております！

ルーズはスーザンがお好き？（前書き）

サブタイ変でごめんなさいってか
ひどいサブタイでごめんなさい（涙））

スーザン視点とルーズ視点がありますです（あたし＝スーザン　俺＝ルーズ）

ルーズはスーザンがお好き？

「それでなに？ルーズ。」

あたしはこのときなんで呼び出されたんだろうと不安を覚えていたところだった。

「あのな・・・その・・・」

あたしはみんなからみると明るくてほんわかしてる（自分でも思う）

ハッフルパフにあってるねってよくいわれるだから『はやくいいなさいよ！』

とか『早くしてくんない？『忙しんだけど』とかはいわないで静かに聴くタイプなんだ。

「なーに？」

うぉ！なんだよ・・・そんな顔でみんなよ・・・

俺、その上目使いに弱いんだからよぉ・・・

「だから・・・その・・・スーザン、お前の事好きだったんだ。」

「えっ？」

うそっ？！ルーズがあたしを・・・

「あたしも・・・あたしもルーズが好き！！」

まじか・・・俺、パーティーまってなくてもよかったんだな・・・

そしてこちらも二人の影が重なった事は言うまでもない。

「おーーい。お前ら何処言ってたんだぁ（笑））」

「「「「別に何処でもいいだろ！（でしょ！）」」」」

『きれいにはもってる・・・そう思わない？アンディ。』

『俺も思う。お似合いだな。特に・・・』

『『ジェームズとローズ』』

こうしてジェームズとローズ、ルーズとスーザンがからかわれたという事は

いうまでもない話だろう・・・

ルーズはスーザンがお好き？（後書き）

第三者視点もはいりましたね・・・
ご了承ください・・・

ダンスパーティー　～迎えに行った先には絶世の美女たち～（前書き）

ダンスパーティーでは
創設者の子孫＆そのパートナーとハーマイオニーとロンの子供（ローズ）＆ハリーの息子（ジェームズ）のダンスから始まるという設定です。

ダンスパーティー　～迎えに行った先には絶世の美女たち～

とうとうダンスパーティーの日が来た。僕は
かっこいいドレスローブに身を包み、ルーズと一緒に（スーザンの迎えもかねて）
ローズを迎えに行った。

「どう・・かな・・？／／／」

そこにいたのは絶世なる美女だった。
ハーマイオニーの受け売りだろう、とても白い肌に
ピンクのグラデーションドレスがバラのように良く似合う。

「とっても似合ってるよ？自身もっていいんだよ♪」

「ありがとう／／／」

その頃のルーズは・・・

「ルーズ、あたしへんじゃない？」

「へんじゃないよ、とってもきれいだ。」

「／／／」

スーザンは淡いパープルのドレスに身を包み
ちょっとの化粧と照れてるせいか、頬が赤いのが良く似合う。

「じゃあ行こうか？」
「うん／／／」

ダンスは得意でもエスコートにはあまりなれてないジェームズとルーズ。
しかしそれはポーカーフェイスで隠すが隣の絶世の美女に自分は不釣合いじゃないかと
不安になっている男子たち・・・

そして、女子は女子で隣の美男な彼氏に不釣合いではないかと不安で仕方ないのである。

しかしその周りを通る生徒&先生は横を通るたび
『美男美女ってこのことね』っと心の中でつぶやいていた。

ダンスパーティー　～迎えに行った先には絶世の美女たち～（後書き）

あはは・・・
うまくかけてるといいけど・・・

ダンスパーティー　―フローラは悲しい舞踏会―（前書き）

ダンスパーティー始まります。

ダンスパーティー　―フローラは悲しい舞踏会―

僕たちはダンスパーティーの会場についた。

なぜか前からマクゴナガル校長があわててこちらに向かっている。

「あぁあなたたち、代表の人は集まっていますよ？
　さぁさ、こちらにおいでなさい。ジュリア、スーザンドレスとっても似合っていますよ＾＾」

「「ありがとうございます／／／」」

「それでは、代表のみなさんのご登場です！」

ファンファーレが鳴り響き僕（僕たち）は入場した。

コンコンッ

♪＊＊＊＊＊♪＊＊＊＊＊＊♪＊＊＊＊＊

ゆったりとした音楽が流れ、僕たちは鮮やか（ジュリア特にきれいだ）な衣裳に身を包み
　ダンスを踊り始める。

みんな魅了されている。なぜだろう。みなさん（読者）もお分かりのように

美男美少女たちが代表としてダンスホールで鮮やかにダンスを踊っているからだろう。

次々と先生や生徒たちがダンスに入ってゆくがあるところ（一角）で

イヤーな顔をしながら「相手を間違えた」といわんばかりの沈黙をつかさどっている。

そう、フローラである。

フローラはジェームズにダンスの申し込みをしようと思ったのだが、

ジェームズに「キミにはもっといい人がいるよ」といわれさがしていた。（あきらめた）

そして相手のレイダス・ハーピーは特上の美男（イケメン）だが、特上のナルシストでも

あった。人の話を聞かないためダンスも自分まかせ（ハーピーまかせ）。

きれいになったフローラの心がズタズタにされてしまった。

「あのぉフローラあれだったら俺とおどるか？」

「えっ？あっスノーダー！」

フローラに声をかけたのはフローラの授業の時隣のスノーダー・アレインだった。

「ほんとに！？　・・・じゃあねレイダス。」

「えっ！ちょっ！なんで！？」

「あんたにはうんざりよ。スノーダー。ありがとう行きましょう？」
「あぁ。じゃあ、レイダス。」
フローラは楽しそうにダンスの中に入っていった。
スノーダーはダンスが得意でフローラにやさしくエスコートしてくれる。
フローラはあまりスノーダーと話さなかったのだがたまに話すと楽しい友達であり
ジェームズのあとに好きになった人である。
「ちょっとでないか？」
「うん。」

スノーダーはバラの咲いているテラスにつれてきてくれた。
「じつは・・・前から君の事好きだったんだ。」
「えっ！？／／／／・・・ありがとう。わたしも好きよ。」
「ありがとう。」
二人の影が重なったことはいうまでもない。

ダンスパーティー　―フローラは悲しい舞踏会―（後書き）

長くなりました
感想等お願いします♪

それと、今頃気付いたんですが（11月1日）
ジュリアのことをローズと間違えました（汗）
読者の皆様、お騒がせしました（涙）

アリアのダンスパーティーの夜（前書き）

うまくかけてたらいいな☆
感想等よろしくお願いします！
ルーズの母名前作っちゃいました（笑）（ルーサ）

アリアのダンスパーティーの夜

スローダンスに変わった時、
美男美女カップルが戻ってきた（ジェームズ&ジュリア、アリア&アンディ、スーザン&ルーズ、フローラ&スノーダー　バック&レイラ）

とてもお似合いだ。
こんなカップル何処にもいない。

「「「「「「お相手お願いできますか？お嬢さん？」」」」」」

「「「「「（ニコッ）喜んで♪」」」」」

先生たちはこの5組のカップルを暖かく見守っていた。

みんなダンスがうまくて、美人（綺麗）で美男（イケメン）で。

みんなの憧れの的だ。

そのとき、またファンファーレが鳴り響いた。

そう、ハリー&ジニー、ロン&ハーマイオニーそして、マルフォ

イとルーズの母(ルーサ)が
やってきたのだ。

「「（お）母さん！（お）父さん！」」

「父上！母上！」

マクゴナガル校長はにっこりして、

「さぁさ！みんなそろったのですからダンスを続けましょう！！」

楽しい舞踏会は遅くまであったのだった。

そしてこのダンスパーティーで結ばれたカップルが多かったのは
言う事でもないだろう。

アリアのダンスパーティーの夜（後書き）

どうだったでしょうか？

いつでもリクエストまってまーーす☆

次の日の僕たち（前書き）

ジェームズの両親&ジュリアの両親&ルーズの両親は
ホグワーツにとまりました。（ハーマイオニーは教師なのでもとも
と・・・ロンはたまに、ホグワーツで闇払いについて教えています
（特別教師）。

次の日の僕たち

「ファーンｗｗねむいなぁ・・・」
「おはようジェームズ眠そうね。まぁあたしもねむいけどファｗ
ｗン・・・」
「おはよう・・・ねむいな・・・」
「ほんとね・・・」

「「「「「「「「「「ファーーン」」」」」」」」」」」

「おはよう。みんな眠そうね。」
「その分、夜遊びをいつもしてないんだろ。俺らいっつも抜け出
してなかったか？」
「「そうかも・・・」」
「ロンたちはよくてもアタシはいってませんから。」
「わるかったな。」
「おはよう、みんな。ロンえらく元気だな。」
「そりゃどうも＾＾ってかマルフォイ、美人の奥さんは？」
「妻（ルーサ）なら昨日、パーティーの後ピアノの引きすぎで疲れ果てて寝
てるよ。」

（父さんたち話進んでるけど、父さんたちって夜遊びしてたの！？）

「とりあえずいこう？僕お腹減った。」

「「「「私も」」」」

「「「俺も」」」

「じゃあ行こうか。」

大広間

「ジェームズ、ルーズ。今日ってクィディッチの試合じゃない？」

「そうだっけ！？」

「んっほんとだ！ジェームズ早く食べていかねぇと高学年組みに・・・」

「やっやばい・・・いそげっ！」

「ハガガハガガ・・・・・」

「そういうこと思い出すと早いのね・・・・」

「じゃあいってきます！」

「おいっ！ちょっとまて！スーザン、じゃあいってくるから。」

「いってらっしゃい。レイブンクローとの試合がんばってね♪」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ・・・・・・・・

「「「「「「いっちゃった・・・」」」」」」

「母さんいつもの事よ。」
「そうそう。いつものことだから・・・気にならないでください。」

「俺たちって遅刻の回数・・・」
「0回・・・」
「俺たちってすごいんだな・・・」
「あぁ・・・」

次の日の僕たち（後書き）

感想等お待ちしてまーーーす♪
リクエストもお願いしまーす☆ミ

今日この頃・・・（前書き）

なんか変なサブタイ・・・
ご了承を・・・

華逗葉

今日この頃・・・

試合が終わり、（勝利！）僕たち（ジェームズ）は再び
大広間に戻り、今日は大活躍だっただの、あの時はひどかっただの
ジェームズは親もクィディッチをやっていたためなんだかんだで
ずっと話をしていた。

「そういえば今日ってウィーズリーの新作チョコのお披露目会じゃない？」

「あぁそういえばフレッドとジョージが変なチョコ作ってた。」

「「「「「「「「どんな？」」」」」」」」

「たしか・・・かえるの卵チョコ。」

「「「「「「「「はぁ！？」」」」」」」」

「変だろ？おれもやめとけっていったんだけど・・・」

そのとき、

「「はーーいみなさん新作チョコのお披露目だよぉ！」」

「「「「「「ゲッ！」」」」」」

そんなこんなで、ジェームズたちは新作チョコのお披露目にとことん付き合わされたとさ。

「「「「「「「「なんでこんな目にーーーーーー！！」」」」」」」」

今日この頃・・・（後書き）

かわいそうですね・・・（汗））
ごめんなさい。
次回もよろしくお願いします。

やっぱりキミがいないと・・・（ジェームズ）（前書き）

短ッ！！

ご了承を・・・

やっぱりキミがいないと・・・（ジェームズ）

今日は、大変な1日だった。でもとっても楽しかった。
だってジュリアとずっと一緒にいれたから。

「なぁジェームズ。お前今日ずっとジュリアみてたな。」

「なっ！／／／」

「大丈夫。だって俺だってずっとスーザンを見ていたいよ。でも
気付かれると恥ずかしいからな」

「だよな・・・やっぱり・・・」

「「俺たちってあいついないとだめだな。。。」」

綺麗にはもり、大爆笑する2人だった。

「お前らそんな感じでいると誰かに採られるぞ？」

「父さん！」

「俺も一時期採られたからな。気をつけろ～」

「なんてのんきなんだ・・・」

「頑張るんだな。俺の場合大丈夫だかんな。」

「このやろ～～～～！」

こうして2人の馬鹿笑いがはじまったのであった。

やっぱりキミがいないと・・・　（ルーズ）（前書き）

なんか詩っぽいですが・・・

感想等お待ちしてまぁす☆ミ

やっぱりキミがいないと・・・（ルーズ）

今日はスーザンとホグズミードでショッピングをしていた。

冬だからあたりは一面雪化粧をしていて、ホグズミードはクリスマス一色だ。

「きれいね♪雪が真っ白だわ。ステキね☆ルーズ！」

「あぁ。スーザンって雪がすきなんだ？」

「うんっ！だって真っ白で心が安らぐ気がしない？」

コレだからスーザンってやさしいんだ。

俺が、スーザンを好きになったのも無理はないと思う。

「ほぉ。確かに・・・だからスーザンも心が綺麗なんじゃない？」

「ありがとう・・・うれしい・・・」

スーザンが照れてる！かわいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！

「いや・・・それにスーザンって雪が似合うよ。」

「そう？」

「あぁ。肌が白くて綺麗だし、タイプからしても似合うと思う。」

「ありがとう！」

「じゃぁそろそろいこっか。」

「うんっ！」

俺たちは歩いた。スーザンと手が当たって・・・彼女は迷ったみたいだけど、

俺から手を繋いだら彼女はびっくりしたみたいだった。

でも彼女はうれしそうに手を握り返してくれた。

そのとき思った。

”俺ってキミがいないとダメだな”

ってね。

やっぱりキミがいないと・・・　（ルーズ）（後書き）

うまく書けたらいいなぁ☆ミ

マリアの発言（前書き）

チョウの子供作っちゃいました。

マリアの発言

ただいま、マクゴナガル校長じきじきの変身術の授業。

いい先生になりそうな人が今はいないからマクゴナガル校長がやってるんだって（あたしはマクゴナガル先生って呼んでる）

「それではこのふくろうをアリに変えます。出来るものもいると思いますがしっかりと見とくように」

「「「「「「「「はいっ。」」」」」」」」」

これまたマクゴナガル先生ってすごいと思う。

アタシ的に一番すごい魔法使いは、もういないけどダンブルドア前校長。

マクゴナガル先生はその次に入るくらいだ。（ちなみに3番目はアタシの両親とハリーおじさん）

「それでは、今日はこれで終わりです。それと今週ホグズミードにご褒美としていく事になりました。各自、親にこの書類にサインをもらってくるように。」

そしてあたしたちの机の前に一人ずつ1枚の書類が置かれた。

大広間☆。＋・

「今日の変身術の授業おもしろかったぁ。」
「俺たちクィディッチの朝練でなしだったんだよな。一時限目。」
「お母さんに聞いて『逆転時計』借りてこよっか？」
「それだと体力使うからクィディッチに響く。」
「そっかーーー。」

今日もとってもおいしいホグワーツの昼食をとりながらおしゃべりしている。

そこへ。

「みんなぁ今日暇？」

そこにいたのはマリア・チェン・スーティーだった（チョウの子供）。

「なんで？」
「きょうあそんでいいって先生が。」

「じゃぁ遊ぼう！」

こんな感じでどんどん話が膨らんでいった。

遊ぶぜぃ！

「じゃぁいまからパーティーはじめーーーーーーーー！！」

そう。マリアの発言はとうとうパーティーになってしまった。
しかし、みんな楽しそうだ。

それから・・・約2時間

「あなたたち、そろそろ寝ないとレイブンクローから苦情がきま

すよ！」

マクゴナガル先生が忠告に来てパーティーは終わった。

グリフィンドール（男子の部屋）

「楽しかったなぁジェームズ。」

「あぁ！まさかあんなに来るとは思わなかったけどな（笑）」

「確かに！」

来た人数は・・・なんと５０人。

そりゃ驚くのも無理はないだろう。

「「じゃぁおやすみ！」」

（女子の部屋）

「テンション高かったわねぇマリア。」

「確かに☆でも楽しかったぁ☆」

「「じゃぁみんな明日ね☆おやすみぃ！」」

進級　―2年生―（前書き）

みんなが進級しました！

進級　―2年生―

今日で進級して、2年生なんだ。

「みなさん進級おめでとうございます。
　これからも友とともに学問にはげみ、楽しい毎日を過ごしましょう」

こんな感じで新入生の歓迎会も終わり、
僕たちは、グリフィンドールの談話室でたわいのない会話をしていた。

「そういや明日ってロンドンにいけるんじゃなかったっけ？」

「「「「「「「そういえばっ！」」」」」」」

今年、数ヶ月に一回ロンドンで自由に出歩く事が許されるようになったのだ。

しかし、罰則をうけるものもいる。

なぜなら、勝手に魔法を使ってしまう頭を使わないものがいるからだ。

そのため、生徒は厳しく先生方に監視されている。

進級　―2年生―（後書き）

次回、ロンドンでブラブラ・・・

ロンドンでブラブラ（ルーズとスーザン）

「これ可愛い！！」

白いワンピースを身にまとった美しい少女。

彼女はある青年に笑顔を向けて話している。

「どうかな？」

「似合うと思うぜ。あとコレ着てみたら？」

青年も他の人より数段かっこいい。

彼の手にしたのは、花柄のほんわかしたチュニック。

「どう？」

彼は、本当に彼女の魅力を引き出すのがうまい。

彼女を見たとたんほかの男たちが振りかえる。

まぁルーズこと青年は少女ことスーザンを見て顔を赤くしている。

まぁしょうがない。だって綺麗だから。

「これからもアタシの洋服選んでね？あたしもアナタの服を選ぶから。」

二人は照れながらも仲良く、静かにロンドンでのショッピングを楽しんでいた。

ロンドンでブラブラ（ルーズとスーザン）（後書き）

ちょっとかっこつけすぎですね・・・
ごめんなさい（汗）
これからもよろしくお願いします！

ロンドンでブラブラ　（ジェームズとジュリア）

「ジェームズ！似合うじゃない。いい感じ！」

今日は待ちに待ったロンドンの外出日。

ただいま僕はジュリア（彼女）に今日着てきた洋服を褒めちぎられている。

まぁジュリアは僕の好きなブランドのガールファッションの服が大好きで、
彼氏の僕と趣味が合うからとてつもなく今日の僕のファッションが気に入っている。

「ねぇ・・・あたしケーキ食べたい。」

「ケーキ？いいけど何処で食べる？」

っと目の前にオシャレななんとケーキバイキングのあるカフェが！！

「あのお店とかは？」

「いいね。じゃぁいこう！」

「ここのチーズケーキおいしい！」

ジュリアはケーキのあまりのおいしさにずっと微笑んでいた。

しっかしほんとに冗談なしでケーキ、うまいんだけど。

「ここの紅茶。おいしい。」

僕はとりあえずと思い飲んだ紅茶の味に驚いた。

「いい香り・・・ほんとだ！おいしい。」

こんな感じで僕たちは外出日を存分に満喫して。

「また一緒にこようね？」

「あぁ。いいよ。」

クィディッチ　―彼は誰？―ジュリアの疑問

今日はクィディッチの試合。対戦相手はハッフルパフ。

スーザンとルーズは2年になってますます仲が良くなった。

だけどクィディッチは関係なくお互いチームに入っているせいか、

スーザンはブラッジャーをチームから遠ざけルーズは相手チームの男と

ボールの取り合い。

そしてスニッチ。

そう、今日も華麗にジェームズがとろうと・・・

あれっ

「「「「「「「がんばれがんばれグリフィンドール！！」」」」」」」

とうとう声に出た

「あれっ？」

「どうしたの？ジュリア。」

「ねぇあの子だれ？」

「えっ？あっ！ほんと！いつもとシーカー違うし・・・」

そう、私たちが一番びっくりしたのは。

「「ジェームズについてきてる。」」

そう、ジェームズについてきてるってこと。

試合終了後。

「アリア、なんか考え事？」

「アンディ。今日の試合のハッフルパフのシーカーって誰なの？」

「それ。スーザンに聞けばいいんじゃない？」

「聞いたんだけど、知らないって。スーザンも試合で大変だったから覚えてないって。」

そう、あれからチームのメンバーに聞いてみたが知っているものはいなかった。

「そういえばジェームズについてきてたな。」

「えぇ。ジュリアがきずいたのよ？」

「そういうことか・・・調べてみるよ☆」

「ほんと！ありがとうアンディ！」

ギュッ

アリアは夢中でアンディに抱きついた。そのときアンディの顔は夕焼け色に
染まっていた。

クィディッチ　―彼は誰？―ジェームズの疑問

ジュリアが疑問に思っている頃ジェームズは。

（あと少し！ジュリアが応援してくれてる。ルーズも頑張ってるんだから！）

そのとき横から、

「悪いね、スニッチはいただくよ。」

そう、知らない子だった。

（させるもんか！）

バッ！

パシッ！！

とったのは・・・

「ごめんね？立てるかい？」

「あぁ。くっそー取れると思ったのによー！」

そう、ジェームズだった。

そして、グリフィンドールが勝利した。

しかし、ジェームズは彼の名前を聞けなかった。

「彼は、いったい誰なんだ？」

疑問の彼は―

その時は突然やってきたんだ。

「ハーイ。キミ俺のこと覚えてるかな？ジェームズ君？ジュリアちゃん？」

「「へっ？・・・あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」

そう。クィディッチの時疑問に思った彼。しかもその制服を僕は見て驚いた。

「キミ。グリフィンドール！？」

「えっ！？だってクィディッチの時、ハッフルパフにいたじゃない！！」

そう、制服のアップリケはグリフィンドールだった。

疑問の彼は意地悪な笑みを持っていて。

「そうなんだ。よろしくな。俺はフィデルフィ・ネビルだ。」

「「「「「「「「えええええええええええええええええええええええ
ええ！！！！！！！！」」」」」」」」

そりゃぁびっくりするよ。

なぜならぜんぜんネビル先生に似てないんだもん！

ネビル先生から息子さんのフィデルフィのことは聞いてたんだ（実際父さんにも聞いた。）

でも、全然似てなーーーーーーーーーーーーーーーい！！

「おっ、フィデル。皆一緒だな。」

そこにきたのはネビル先生。

（ネビル先生！全然似てないじゃないですか！）

（（（そうだそうだ！！））））

（しょうがないだろう？ルーナに似てるんだから。性格はどっちにも似てないけどね。）

ルーナっていうのは、ネビル先生の奥さん。

とっても綺麗なんだって（ジュリアの母さんから聞いた）

「よろしく！っていうか、俺昨日からここだからよくわかんねーんだけど。」

「そういえば転校生って魔法界ではないことじゃないの？」

「フィデルは特別だ。もともと違うとこにいたんだが、いろいろ理由があってな。」

「じゃぁ」

「「「「「これからよろしく！！！！！！！！！」」」」」

綺麗な彼女（前書き）

フィデルフィ視点です！

綺麗な彼女

僕は、目を疑った。

「そうそう！だから～～～でねぇアハハッ」

綺麗だ。今まで男子校の魔法学校にいた俺はいつも街に行く時、綺麗な女子はたくさん見るのだが、あんなに綺麗な女子は見た事がない。

俺のものにしたい。

だけど、その横には。

「ジュリア、それはさぁ～～～」

彼がいた。父さんと仲が良かったハリーポッターの息子、ジェームズ。

だけど、いつものとおり俺は引き下がりたくねぇ。俺はあきらめが悪いから。

「ハーイ。キミ俺のこと覚えてるかな？ジェームズ君？ジュリアちゃん？」

クリスマスパーティーの誘い

ある日ホラス・スラグホーン先生（これからはホラス先生）に突然。

「キミたち、わしの開くクリスマスパーティーに来ないかね？」

といわれたんだ。

楽しそうだから、みんな

「「「「「「「「「もっちろん！！」」」」」」」」」

って答えだった。そしてホラス先生は、

「じゃぁ２４日に男女ペアを作って私の部屋に来なさい。」

だった。

「「「「「「えーーーーーーっ！！」：」」」」」」

どうしよう。ジュリアと行きたいけど・・・

この前、フィデルに会ってからフィデルがずっとジュリアを見て

る気がするんだ。

「ジュリア、一緒に行く？」

「そうね・・・でもまず行こうかなぁ行かないどこうかなぁ。
考えとくからもう少しまってね？ジェームズ。」

「あぁ。」

ジュリアはまずいくかどうかも決めてなかった。

だからまってるんだ☆

でも少し不安なんだ。だってこの前、

「ジュリア、俺とクリスマスパーティー一緒に行かないか？」

「・・・ごめんなさい。少しまってくれる？」

っていってた。

ジュリア、キミは誰を選ぶんだい？

パーティーの数日前　―ジュリアの決断―

「そうだったわ。フィデル、悪いけどあなたとはパーティーにはいけない。
　ほんとにごめんなさい。」

「そうか・・・しょうがないよ・・・ありがとう。」

いま。ジェームズはいない。

みんないきなり皆の前でそんな話をされたため目が点になっていた。

「どうしたんだい？」

「あっジェームズ、パーティーの事だけどいいわよ☆
　一緒に行きましょう？」

「もちろん！」

僕を選んでくれたんだ。

数日後。

「俺、マリアと行く事にしたんだ。」

「マリアと！へぇ・・・てっきり違う人かと・・・」

「俺が言おうか迷ってたら向こうから言ってくれたんだ。うれしかったよ☆」

「へぇ・・・ってことは・・・」

「そっ！あたしたち付き合う事にしたの！」

「「マリア！」」

これで、みんなめでたしめでたしのペア決めが終わったとさ♪（ちなみに他のペアはそのまま）

パーティー当日

「ねぇねぇ。ジェームズ。フローラのドレス、可愛いね・・・」

今回、あたしは母に、

『これは私がお父さんの気持ちに気づく前に行ったパーティーのドレス。

このドレスがあったから私はお父さんと結婚出来たようなものよ？

あなたもペアの人とずっと一緒にいられるといいわね？』

といわれ（相手がジェームズって知ってるの）思い出のドレス、バラの花びらのようなスカートのドレスを着ているの。

ジェームズはすっごくキュートだって（すっごくうれしい。誰だってキュートって言われたらうれしいでしょ？）

ルーズに聞いたんだけどジェームズはお父さん（ハリー）のドレスローブを着てるんだって。

そしていまあたしはフローラのドレスに魅了されてる。

だってすっごくキュートなんだもん！

それにフローラに色があってていいなぁ（フローラは肌が白いから白に腰のところの黒のリボンが可愛い！）

「でも・・・その・・・ジュリアもすっごく可愛いよ？
だから自信もっていいんだから。ね？」

「ありがとう・・・ジェームズ！」

その頃フローラは・・・

「このドレス、やっぱり可愛い。選んでくれてありがとう。スノーダー。」

「いいや。キミは肌が白いからその色がいいと思って。」

あれからフローラはレイダスには付きまとわれておらず相変わらずスノーダーと仲が良かった。

「フローラ！そのドレス、すっごくキュートね！」

向こうでジュリアがこれまた可愛いドレスを着て
私のドレスをほめてくれてる。

「ジュリア！アナタのドレスもステキよ！」

そして、いろいろなペアが集うなか、皆がとても楽しく
特にジェームズとジュリア、そしてフローラとスノーダーはとても
楽しいパーティーだったのであった。

マグルの見学（前書き）

マグルが学校に来ちゃいます！（話的にあたしがこのイベント作っちゃいました）

選ばれた人ですけどね？

詳しく聞きたい方はメッセージください！

マグルの見学

今日はパーティーが終わって3日後。

そして今日は、

「皆さん。今日はマグル見学です。気を引き締めて望んでください。

そして、言わせてもらいますが少しならいたずらもかまいません。

授業中は駄目ですが。」

「「「「「「「イエーーイ！！」」」」」」」

じつは、僕の父さんのいとこのダドリー（呼び捨てでもいいって父さんが散々痛い目合わされたから）

の一家がこの見学で来るんだよなぁ・・・

僕的にはダドリーの子供、バグスとレイラ（レイラは別にいい。けなさないし）はあいたくない存在。

いっつも僕と友達と父さんと母さんをけなすんだ。

「それでは、どうぞ。」

たっくさんはいってきた。

「よぉ。ジェームズ。授業お手並み拝見だな！あとクィディッチだっけ？」

「あぁ。そうだよ。まぁみてなよ。」

「楽しそうねぇ。あたしも魔女になってみたいな。」

「多分体験とかあるんじゃない？わかんないけど。」

「楽しみだわ！」

「じゃぁあとでなレイラ。バグスはご勝手に～～。」

最後に嫌味をいってやった！

レイラは可愛クスクスと笑っている。

バグスはイヤーーな顔してるぞ笑えるな（笑）

こうして僕たちのめんどくさいと思っている
マグル見学が始まった。

授業　（ジェームズ＆レイアン）―戦闘訓練―（前書き）

魔法の名前がわからない人はメッセージに
わからない魔法の名前を書いて私まで！

（ウィキペィアでもでてきます）

授業　（ジェームズ＆レイアン）―戦闘訓練―

「それでは、そうですねぇ・・・ジェームズ、前へ！」

「はい！」

「それでは、わしのほうからは、そうですなぁ・・・
レイアン、前へ！」

「はい！」

今は、『闇の魔術の防衛術』の授業の真っ最中。

そして今回の授業のテーマは『戦闘訓練』。

昔、父さんとマルフォイおじさんが戦った。

その頃は仲が悪かったからお互いすごい技の出し合いだったんだって。

「1．2．3（ワンツースリー）！！」

「Ａｖｉｓ（エイビス）！」

「その程度か？ポッター。」

「まぁ見てればわかるよ（笑）レイアン。」

「どういうことだ！」

「ｏｐｐｕｇｎｏ（オパグノ）！いけ！」

「わっちょっ！ギャーーーー！！」

レイアンは鳥に追い掛け回され・・・

ズッテーン！！ズバズバズバッ！

レイアンはぎりぎりこけた体を鳥の光線からにげた。

「こっこけた・・・」

「ゆ・・許さないぞ！ポッター！！！」

「ぎょえ！？」

（ねえルーズ。やばくない？）

（うっうん。あれは。やばいよな？スーザン。）

（えぇ。レイアン・ブラッキーは怒らせると・・・）

「許さん！Ｓｅｒｐｅｎｓｏｒｔｉａ（サーペンソーティア）！」

バシュン！

シーッシーッ

（やばいわ！蛇を出したらほんとにあぶない！）

（なぜ？）

（ルーズ！そんなに甘ったれないで！あれは毒蛇よ！）
（（毒蛇！？））

「レっレイアン！よせ！蛇をなおさんか！」

「うるさい・・うるさいうるさい！！！」

「ポッターあぶない！Ｉｎｃｅｎｄｉｏ（インセンディオ）！」

ジューッ

蛇は燃えてしまった。

「大丈夫かね？ポッター君。すまんの。わしの寮の生徒が・・・」

「大丈夫です。それにマクゴナガル先生、僕も一様魔法習ってますから
蛇を出されたときの戦闘時対処法ならいましたし、燃やせばいいのも知っていて
構えていたのですが・・・」

「そうでしたか。さすがですね。勉強を生かすのは良いことです。
グリフィンドール２０点！」

「「「「「やったーーー！」」」」」

「ポッター君が無事で何よりだ。レイアン、キミは減点だ。

スリザリン１０点減点！」

「「「「「そっそんなぁ・・・（涙）」」」」」

「さて。次は誰が使用かの？」

授業　（ルーズとセイラ）　―戦闘訓練―（2）（前書き）

戦闘訓練の続きですね☆
そして一人またキャラ増やします。

セイラ・ローズ
寮・・・レイブンクロー
杖・・・ユニコーンとマーラ（セイラの母）の髪の毛
性格・・・温厚な性格。静かだが、魔法の
　威力は計り知れないほど。
　レイアンが怒ってもセイラは軽々よけてしまう。

授業　（ルーズとセイラ）　―戦闘訓練―（2）

「それでは次に・・・ルーズ！前へ！」

「はい。」

「それでは今度は私の寮でいかがかな？
　じゃぁ・・・セイラ、キミでいいかな？」

「はい、もちろんです。フリットウィック先生。」

「初めまして、セイラ。手加減はしたほうがいいかな？」

「最初はしてくださいな＾＾しないほうがいいと思ったら
とことん本気で戦いましょう。」

「わかりました＾＾」

「それでは位置について！1．2．3．！」

「Ｉｍｐｅｄｉｍｅｎｔａ（インペディメンタ）！」

「おわっ！」

ルーズは吹き飛ばされてしまった。

（すごい！こんな相手と戦えるなんて夢みたいだ！）

「本気を出してもよさそうだね。」

「そうかしら？」

「甘いね・・・Ｏｂｓｃｕｒｏ（オブスクーロ）」

「きゃっ！」

「まだまだ行くぜ！Ｓｔｕｐｅｆｙ（ステューピファイ）！」

「うっ！Ｆｉｎｉｔｏ　Ｉｎｃａｎｔａｔｅｍ（フィニート・インカンターテム）」

「なーんだ。つまんねー。」

「うるさいわね！Ｌａｃａｒｎｕｍ　Ｉｎｆｌａｍａｒａｅ（ラカーナム・インフラマーレイ）！」

「おわっ！」

（なんか灼熱の戦いって感じね。）

（なんか見たところルーズと五分五分だわ。）

（確かに、そういえば、アリア、いつ入ってきたの？）

（あぁ。逆丹時計で他の授業に出た後ココに来たわ。）

（アリア、なんかローズのお母さんみたい。）

（そうかもね）

『灼熱の戦い』とはいい表現な感じなんだ。

やばいよ。これ、なんかすごいことになってるよ？

でも、そろそろ終りそうだけど・・・。

どういう終わり方で終わるか全然検討がつかないんだけど・・・

それでも、結末はすぐに来たのである。

「Ｓｔｕｐｅｆｙ（ステューピファイ）！」

「もう終りだ！」

「へっ！？」

「Ｐｅｔｒｉｆｉｃｕｓ　Ｔｏｔａｌｕｓ（ペトリフィカス・トタルス）！」

カシッ　ゴトンッ

「そこまで！いやぁ～グリフィンドールは強いですなぁ～～。Ｆｉｎｉｔｏ　Ｉｎｃａｎｔａｔｅｍ（フィニート・インカンターテム）。」

「すみません。フリットウィック先生。」

「いやいや。すばらしい戦いでしたね。」

「そうですね。フリットウィック先生。今回の戦闘訓練は終りです。

他のものは次回の『闇の魔術と防衛術』を授業でとりなさい。」

「「「「「「「はい！！」」」」」」」

こうして、
とてつもない迫力のあった戦闘訓練の第一回の幕が静かに、いや騒がしく、
閉じたのであった。

次の日の朝　―大広間マルクとセイラは仲がいい！？―（前書き）

セイラ視点です☆
寮が違うのに仲がいい（すきなのか？）二人を書きました☆

次の日の朝　―大広間マルクとセイラは仲がいい！？―

「だからねぇ☆～～～だよ？だからぁ～～」

今日も楽しく大広間に友人ときました（笑）

「おはよう。セイラ。」

「あらっおはよう！マルク、今日は一人？」

「あぁ、みんな試験勉強で忙しんだ。僕は朝勉強すると眠くなって逆に成績が
落ちるから勉強はしないんだ。」

「へぇ。あたしは、勉強は昼にみんなでするタイプだから。
レイブンクローは結構頭の回転がいい人が多いしあたしもその一人みたい（笑）」

「じゃぁ朝はレイブンクローの人はみんな試験のある数日前でも
普通におしゃべりしたり、ご飯食べてるんだ？」

「そうそう。」

「マルクーー？早く来ねーとクィディッチの朝練遅れるぜーー！」

「おぉーーまっててくれ！じゃぁセイラ、また昼に会えば。」

「えぇ。クィディッチ頑張って。」

「じゃぁ。」

タッタッタッタ・・・

「セイラぁ。もしかしてぇ・・・」

「わっちょ・・・レイラ！もう、いきなりなによ・・・」

「あぁぁぁぁ！もしかしてほんとうなのぉ！！」

「ちょっとレイラ！」

あたしってどうしてこう・・・感情をすぐ読み取られちゃうの？

試験勉強　―ジェームズは期待の星？―

「だから～これはこうでこれはこう！わかる？」

「わかんねぇ・・・なんでジェームズとローズはそんなに勉強得意なわけ？」

「あたしは親譲りよね。お母さん学年でトップを争ってたらしいし。」

「僕は、どうなんだろ？父さんは普通だったらしいし、
母さんもまずまずの平均値だったらしいし。」

「ジェームズとか最高の才能じゃん！」

「「確かに・・・」」

「なんでアリアまで？アリアも成績いいじゃん」

「そりゃぁ創設者の子孫だから？」

「「「嫌味・・・」」」

「あははっ」

相変わらずみんな仲いいし、なんかいつもどおりって感じ（笑）

「アリア、ちょっといいかね？」

「「「ホラス先生！！」」」

「みなさんおはようｖｖ相変わらず仲がいいのぉ。」

「ホラス先生なんですか？」

「あぁ、そうじゃったそうじゃった。キミにというかキミたちに頼みがあるんじゃ。」

「頼み？」

「そうじゃ。今日から試験があるだろう。」

「それがどうしたんです？」

「この中で誰かに満点を取ってほしいのだが・・・」

「そういうことですか。」

「それが、創設者の子供の満点は受け付けられなくての・・・」

「ってかなんで満点を取るんですか？」

「あぁ。今回キミたちが満点を取ると、３年になったときに監督生になれるように、マクゴナガル先生が手配してるのでなぁ。」

「そういうことですか・・・」

「それで、寮はちがうがとりあえず何人かに絞ってこのことを話しているのだが、
わしの寮は大丈夫との声は有るんだが、ハッフルパフが妙に心配で、
アリアはスーザンを仲がいいみたいだったのでな、忠告をしといてほしかったのだ。」

「わかりました。伝えときます！」

――試験終了――

「楽勝だったな。ジュリアはどうだった？」

「あたしも大丈夫。ルーズは？」

「案外得意なやつしか出てこなかったから助かった」

「「（（笑））」」

「アリアは？」

「あたしは大丈夫だけど・・・スーザン」

「あたしも、得意なのしか出てこなかったから大丈夫だと思うわ。」

「「じゃぁ遊びますか？」」

「「「「「イエーーーーーーーーーーーーーーーーイ！！！」」」」」

こうして、面倒くさい試験勉強&試験が終わってハイテンションになった
ジェームズたちでした。

（笑）

試験の結果　―アリアの才能は勉学にアリ！？―（前書き）

試験を受けた人数は適当です。

試験の結果　―アリアの才能は勉学にアリ！？―

「ジェーーーーーーーーーーーーーーームーーーーーーーズ！！！！！！！！！！！」

向こうからジュリアが大声で僕を呼びながら走ってきた。

「どうしたんだ？　ジュリアそんなにあわてて。」

「だって試験結果見てびっくりよ！！」

「なにが。」

「だからけっかが！」

「ジェームズ行くか？」

「ルーズは？」

「俺どっちでもいい。」

「じゃぁ行くだな。」

「早く行きましょう！　ぜったいびっくりするわ！」

確かに行ってみて、いやこういう風に冷静に言えてる僕がすごいんだけど（内心とっても興奮してる）

ほんとにびっくりする結果だった。

――― 試験結果 ―――

満点・・・500点　試験受験生・・・1999人

1. アリア・グリフィンドール　（499点）
2. ジェームズ・ポッター　（498点）
3. ジュリア・ウィーズリー　（487点）
4. ルーズ・マルフォイ　（450点）
5. レイラ・コーラル　（448点）
6. アンディ・レイブンクロー　（439点）

（続く）

「やべぇ！俺４番じゃん！」
「僕とか２番！？」
「驚くとこが違ーーーーーーう！！」
「「へ？」」
「ジュリアをぬいちゃったってこと？」
「ちがう。」
「じゃぁ俺が４番にはいってること？」
「あんたたちバカ？」
「「じゃぁなんなんだよ！！」」
「アリアの点数を見なさい。」
「アリアの点数」？って・・・」
「「エーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」」
「ね？でしょ。」

「1問しか間違ってないじゃないか！」

「やばすぎるだろ！」

「でしょ？アリア、向こうで顎抜かしてるわ。」

確かに。向こうで口をあんぐりあけて、
自分の点数に見入っている。

「アリア？」

「は、はーい。ジェームズ。」

「大丈夫か？アリア。」

「う、うんって言いたいけど、だいじょぶくない。」

「ありゃりゃ。」

「ありゃりゃ。」

そんな感じで、みんな一日中（とくにアリア。）その試験結果に
見入られていたんだ。

あの点数まぢなのカーーーーーーーーーーーーーーーーーー！
！！！！！！！！！！

3年　―新入生にはルーズの妹！？―

「それでは組み分けを始めます。」

どんどん名前を呼ばれていってる。僕の弟『アルバス・ポッター』もグリフィンドールになった。

でも次の名前に僕は頭の上に？をうかべた。

「マリーナ・マルフォイ」

（ルーズまさか・・・）

（妹だぜ？なんか変か？）

（妹いたの！？ルーズ！）

（いたぜ。ジュリア。）

（ってことはまさかこの下にもいないでしょうね）

（いないいない（笑））

（笑ってる場合！？）

（わりー。アリア。でもなんで驚くんだ？）

（（（だって似てないんだもん！！））））

（そんなに？）

（（（そんなに。））））

「グリフィンドール！！」

「おっマリーナ。グリフィンドールおめでと。」

「ありがとう。お兄ちゃん。あと皆さん初めまして（ペコッ）」

「「「「「かっわいいいいいいいいいいいい”！！！」」」」」」

「ありがとうございます（照））」

こうして、驚きの組み分けが無事終わったのであった（笑）

あれれ？

あるとき、アリアがあることに気付いてルーズに言った。

「ねえルーズ。」

「なに？」

「マリーナ、さっきからコールによそよそしんだけど・・・」

「あぁマリーナと同い年の？」

「そう。どうしたのかしら・・・」

コールとはコール・セルバー。マリーナと同じグリフィンドールで1年生のことだ。

「大丈夫だろ？怖いんじゃね？そんぐらいならいいよ。」

「あたし的に怖いんじゃないと思うんだけど・・・」

「んあ？なんかいったか？」

「もう！いいわよ！スーザンにでも聞いてみたら！？」

あらら・・・いっちゃった。

「怒らせたなぁルーズ。」

「な、なんだよ！じゃあマリーナ、どうしたって言うんだよ！」

「ちょっとこっちこい。」

（なんだよ！）

（僕が思うに・・・マリーナはコールがすきなんじゃないか？）

（はぁ？）

（この前、ジュリアにマリーナが相談してたんだよ、好きなやつがいるってな。）

（ほぉぉ？で、それがコールだと？）

（そのとおり。お互いよそよそしいから、お互い好きなんじゃないかな。）

その後、ジュリアにあい、聞いてみると・・・

「えぇそうよ？マリーナに好きな人がいるって相談を受けたわ。」

「それ誰なんだよ。」

「だれにも言わない？」

「僕も知りたい！」

（言わないでよ？それは、）

（（それは？））

（コールよ。コール・セルバー）

（やっぱり。ゆっただろ？ルーズ。）

（そうなんだぁ知ってて良かったかも）

（（なんで？））

（あいつこの前までマルクが好きだとか言ってたんだ）

（（うっそぉ！！））

（ほんと、だから変わってくれてよかった）

（そうね☆）（そうだね☆）

こうして、安心できたルーズは疲れが出たのか1日中授業の間、寝ていたのであった（笑）

夏休みにはジェームズの家で大遊び。

「ねぇねぇ。もうすぐ夏休みじゃん。みんな予定ある？」

「予定ぃ？ないな。俺はとことん暇だから。」

「あたしもぉ、夏休みってひまよねぇ。」

「ってことはみんな暇―？」

「「「「暇ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」」」

「じゃぁさ、僕ん家来ない？」

「「「「えっ？」」」」

「父さんが暇だったら友達呼んで遊んでいいって！
よかったら家来て泊まっていかない？」

「「「「行くぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！」」」」

「即答・・・（汗）」

「いつからいいの？」

「一回荷物置いて1週間後の×日とかどう？」

「いいね！」

「じゃぁ×日に僕の家で！」

「「「「やったーーーーーーーっ！！」」」」

夏休み☆　ジェームズの家

「「「「「おっじゃまっしまーーーす！！！！！」」」」」

「いらっしゃい。どうぞ（ニコッ）」

グイッ

（ねぇちょっと！）

（な、なんだよ、スーザン。）

（ジェームズのお母さん、あんなに美人なんて聞いてないわよ！）

（だよな。俺も美人だと思うけど・・・お父さんのほう見てから言った方がいいよ）

（ハリーポッターさんでしょ？そんなの驚かないわ！だって教科書に詳しく載ってたし。

写真は載ってなかったけどさぁ・・・）

（そういう意味じゃないって！顔みろよ。か・お！）

（顔？）

「ジェームズ！俺の本を何処に隠した！」

「隠してないよ！ちゃんと本棚に置いた！」

「それがないから聞いてるんだよ！」

タンタンタン・・・・。

階段から降りてきたのはとてつもなくかっこいい（年がわかんないくらい若く見える）

ジェームズのお父さんハリーポッターさんだった。

「ジニー。見てないか？カーダー・ポクレインの『探れし、さすれば道開かれん』って本。」

「探れし、さすれば道開かれん？さぁ・・・見てないからわからないわ。」

「どこだろう・・・？ジュリアたち父さんたちと一緒に探すの手伝ってくれない？」

「もちろん！おもしろそうね！」

「やろーー！」

こうして本探しが始まったんだけど・・・

「キャー！」

「おわっ！」

「ヒィッ！」

本は、暴れるものから歌を聞かせて眠らせるものまで・・・
たくさんありすぎてわけがわからない。
「ったくどこにあるんだ？」

「ここですよ。ハリーポッター。」

「ありがとう。でもなぜココに『屋敷しもべ妖精』がいるんだ？」
「私はアナタにお使えするためにココにきたのです。
名前は『パルナサス』でございます。ポッター様。」
「じゃぁ。今日からココのしもべ妖精？」
「そういうことになります。」
「は、はじめてみたわ！屋敷しもべ妖精！」

「俺は家にいるぜ。シェーパーって名前の。」
「スーザンとアリア、とバックとアンディは？」
「「「「いる。」」」」
「じゃぁこれでいないのうちだけぇ？」
そのとき、外からふくろうの鳴き声が聞こえた。
ホーッ　ホーッ
「おっヘドヴィグ。なんだ？なんだロンからだ。」

「お父さん。なんて？」

「僕のところにコーターって名前のしもべ妖精がきたってさ。」
「やったーーー！」

こうして、これまたすごいことに

全員の家に屋敷しもべ妖精が居座る事になった。

いきなり訪問！？ダドリー一家（前書き）

ダドリーの妻の名前作っちゃいました（笑）
まぁ、本編でダドリーは結婚するか定かじゃないですけど・・・（汗）

いきなり訪問！？ダドリー一家

ピーンポーン

ジェームズとルーズとバック、そしてアンディが魔法チェスで戦っていて
ジュリアとアリアとスーザンが魔法のモノを浮かす魔法を練習しているとき、
いきなり家のチャイムがなった。

「誰だろ？」

「おーい！ジェームズ出てくれ！いま手が離せないんだ！」

「わかった！ごめん。ちょっとまってて。」

1階に降りて玄関を開けると・・・

「・・・。ジェームズか、ハリーはいるか？」

「父さんなら上で仕事してる。あがっていきますか？」

「そうさせてもらうよ。息子たちもいるから遊んでなさい。」

「ハロー、ジェームズ。お久し振り☆」

「けっ！こんな家かよ。呆れるぜ。」

「ちょっとバグス！家よりココのほうが大きいわ。大体失礼でしょ？」

「いいんだレイラ。友達もいるから上で遊ぼう？バグス、お前は勝手にしてろ。
それと勝手に僕のものを触ると火傷するから気をつけとけよ。
まぁ信じてなかったら触って
見ればいい。怪我するのはお前だ。」

ジェームズとレイラは2階に上がっていった。

「お帰りジェームズ、ってその子だれ？」

「レイラっていうんだ、ダドリーの娘。バグス見たいな性格じゃないから
大丈夫だよ。」

「初めまして☆レイラ・ダーズリーです。」

「可愛いなぁ・・・あたしもそんな風になってみたい！」

「全部、お母さんの遺伝子だと思うよ？お父さん、デブだしバカだし
何にも出来ないし・・・お母さんがかっこよくてしかたない！」

意外な事を思う、レイラでした・・・

お泊りするの！？（前書き）

レイラ視点&ジェームズ視点です。

お泊りするの！？

「おっお泊りするの！？」

「そうだよ、バグス。楽しい夜になるといいなぁ。」

「うれしいわ！スーザン、アリア、ジュリアまた一緒に遊べるね☆」

「「「やった！レイラ、上で遊びましょう！」」」

「うん！じゃぁ夕食のときにね！」

タンタンタンッ

レイラたちは2階に遊びに行ってしまった。

そのとき、

「あっ！！」

いきなりルーズが大声をあげていった。

「ど、どうしたんだよ。そんな大声だして。。。」

「宿題！今日やらないといけないやつあるぜ！」

「「「なんの？」」」

「天体だよ！天体図を書かないといけないやつ！」

「「「やべーーーーーーーー！！」」」

「早く行きなさい。宿題、出来なくなるわよ？夕食になったら呼ぶわ。」

「ありがとう母さん！行こう！」

ダダダダダダダダダダッ！

「天体図かぁ・・・なつかしい・・・。」

「天体図、以上にうまかったわよね。ハリーは。」

「そうだっけ？」

こんな感じでとりあえず、宿題の存在にきずいた僕たちは大急ぎで宿題を済ませ、遊びまくったんだ。

あっもちろん、夕食はばっちし食べたよ☆

流星群は恋の嵐を呼んでくる！？（前書き）

寝る前のお話。

ジェームズが流星群の存在を思い出します（まぁジェームズが気付いたって事ですね☆）

流星群は恋の嵐を呼んでくる！？

「きれい！！」

いま、僕たちは2階のベランダで流星群を見てるんだ。

「ステキ・・・。」

「そういや、今日だったもんな。忘れてたぜ。」

グイッ

（レイラ！？）

（ちょっときて・・・。）

僕はレイラに引っ張られてベランダをでて僕の部屋にいった。

「どうしたんだよ。」

「あのね？じつは・・・。私、アナタが好きなの。」

「えっ！？」

「その・・・。気持ち知ってて欲しくて・・・。」

ガチャッ

「何してるの？ジェームズ、ジェームズのお母さんがレモンパイを焼いてくれたわ。
食べましょう！」

レモンパイ！

僕の大好きなレモンパイ！

「うん！今行くよ！レイラ・・・。その・・・。」

「まぁ、ジェームズが好きになるまでとことんやるわよ！
それまで、覚悟しといたほうがいいわ！」

「えっ・・・・。」

しょうがなく、僕はしたに降りていった。

僕、大丈夫かな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3748x/

最後の戦いが終わったとき

2011年11月21日21時38分発行